

地方  
小出版

情報誌

# アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 136円)
年間	1,500円(税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター  
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町 20  
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

## 壊れながら生まれる

文／絵画検討社・高田マル

### 本のはじまり

本づくりのスタート地点とはどこなのだろうか。あるひとりが「これを本にしよう」と思い立ったとき走る道が現れる、とまず思うが、実際にその道を出るスタート地点はわたしの場合、デザイナーとコンタクトをとり始めたときだ。執筆、編集をひとりで行う一人出版社を営んでいるわたしとしては、そのときはじめて本になるはずのなにかが言葉として自分以外の世界に晒される。執筆者と編集者が別の場合は、きっとそのふたりが出会ったときだろう。あるいは大きな出版社であれば、編集者の案が企画会議にかけられるときなのかもしれない。そこで言葉というかたちをもって話されるときから、本は少しずつ公のものに変質していく。わたしがデザイナーとコンタクトをとったときに始まる世界は、ふたりっきりの小さな世界だが、本づくりにおいてはビッグバンのようなものだ。

わたしが運営している一人出版社「絵画検討社」は2020年2月に出版者登録をして、2020年2月に初めの1冊である『21世紀の画家、遺言の初期衝動 絵画検討会2018』を出版した。その後、2022年2月に2冊目、今年の2月に最新刊である3冊目を刊行している。本稿の依頼はおもに3冊目について、ということだったが、少しだけ2冊目の話をさせてほしい。

### コロナ禍に始まった対話

2冊目の『忘れられない絵の話 絵画検討会2020-2021』を作り始めるきっかけは2020年4月に1冊目の刊行記念展示会場で出会った人たちに「忘れられない絵の話」の聞き取りをしたことだった。ひとりの時間が続くコロナ禍に画家としての自分を見つめすぎるのに疲れたわたしが、他人にとっての絵の話を聞いてみよう、その場限りの企画として聞き取りを行った。しかしいざ聞き始めてみると、かなりプライベートな話をしてくださる方が多く、これはたいへんな話を受け取ってしまったでしょうと悩むことになった。そこで、わたしが他人から受け取ったものをもっとも真摯に保存しておける場所として、2冊目の本を作ることにした。

その後、約1年かけて54人の忘れられない絵の話を聞き集め文字起こしをして「図版のない記憶の絵画集」として本にまとめていったのだが、近所のコーヒーチェーンをぐるぐる回りながら何十時間におよぶ対話を書き起こし

続け一人暮らしの部屋に帰っていく日々はなかなか孤独だった。そうしてやっとできた原稿をあるデザイナーへ送った。古本実加さんだ。

そのときはまだ、古本さんに会ったことはなかった。わたしが本屋でたまたま手に取った本のデザインを古本さんが手がけており、今度作る本のデザインをお願いできないかとメールで連絡をただけ。そのときわたしは京都、古本さんは高松に住んでおり会えない距離ではなかったが、コロナのこともあって直接会わないまま本づくりはスタートした。

何十通もメールを送りあい、オンライン通話で何度もお話をした古本さんはいつもおしゃれな色のリップをしていて、はじめて話したときにはオレンジ色のリップだったことを覚えている。たぶんその頃はすでに誰もがマスクをしており、リップメイクをしている人が少なかったから印象に残っているのかもしれないけれど、思えばそれはわたしが作りたい本について他人にはじめて語る機会だった。わたしの言葉を受けて、古本さんとてもゆっくりと言葉を選んで話をしてくれた。そして原稿を送ると、頼んだわけでもないのに全文を読んで手書きのメモで感想を伝えてくれた。それは古本さんが装丁を考えるうえで当然の工程だったのだと思うが、わたしとしては最初の読者からの感想であり、また内容をとても丁寧に汲み取ってくださったレスポンスであったため、「この原稿で伝わるのだろうか」という不安がそこで一気に軽くなった。しばらく壁に貼っていたその手書きのメモには「また絵を見たくなる」といった感想があって、それはほとんどそのまま「きっと、また絵を見たくなる」という帯文にさせてもらった。

本のデザインを考えるうえで、打ち合わせるでもなく古本さんとわたしが意識していたことがある。出来上がった本を読者が手に取ったとき、どういう印象を受けるか、ということだ。わざわざ紙の本を作るのだから、そこ以外のなをこだわるのかという気もするが、本のカバーの平面的なイメージをどうするのかということではなく、本の内容を紙の束として造形するときどう表現するのかということや文章の組み方、判型、紙の質感と色、束、で総合的に表現することを自然と話し合う土壌ができていた。それもまた古本さんとしては通常営業だったのかもかもしれないが、なにがとも構造から考えたいわたしにとってとても納得のいく作り方だった。予算の関係であきらめた造形もあ

るけれど、小さめの判型で、組みはゆったり、ページ数を増やして厚みをだして記憶の宝箱のようにしましょう、表紙まわりに1枚ずつ記憶のかけらのような写真をシールで貼って、と話は進んでいった。

### 本を作るときに起きていること

この本を作るうでのわたしの最大の悩みは、本来は曖昧だった人様の記憶を言葉として聞き出し、文字にして、整理をすることがとても暴力的な「壊す」行為なのではないかということだった。結論としては、壊すことで生まれることができる、私的さが壊れることで他の人が読めるものとして生まれる、と思うに至ったのだが、そう思うことができたのは、この本が本という実体を持った紙束となったからであり、その姿が54人の忘れられない絵の話の価値を表していたからにはほかならない。



『忘れられない絵の話 絵画検討会2020-2021』

この2冊目の本づくりは、本づくりという行為でわたしがなにをしているのか非常にクリアにしてくれた。絵画検討社を始めたとき、わたしは私的なものを私的なまま公の場に堂々と置きたいと考えていた。その方法として本を選んだ。しかし特にこの2冊目の本作りにおいては実際の編集過程において自分がその私的なものを壊す立場であることの実感はずばりだった。私的なものをそのまま本にすることはそもそも不可能だが、それを他人に手渡すために行うさまざまな工程はそれを壊すだけではないということは、わたしにとって朝日のような事実だった。

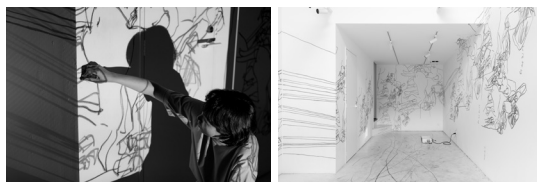
ということがあって、3冊目を作ろうと思い立ったとき、声をかけるデザイナーはひとりしか思い当たらなかった。2023年の春、高松へ向かった。ただ、このときはまだ絵画検討社の3冊目を作るとは決めておらず、どちらかというと少数の冊子としてISBNコードをつけずに出そうかと考えていた。

自己紹介が不足していたが、わたしは出版以前に画家として美術の分野で活動をしている。もともとは「絵画検討会」という展示&対話企画を2016年から行ってきた。その展示を作っていくにあたって参加作家の方々と交わした会話が「なぜ今だに絵を描くのか」ということを物語っていると感じ、文字として残したいと思ったことで出版社を始めることになった。絵を描くというどこまでも私的な行為と、「絵画」という公的な形式を一直線に結びつける橋のような本ができたかと思っていた。ような気がする。もちろん一人出版社をやろうというのは決心のいることだったけれど、それ以降の本も作品もすべて否応無く生まれている。録音した音声があるところにあって、それが可視化される

べきものだったとき、「本を作る」ということは自然と始まっていく。今回の3冊目もそうだった。

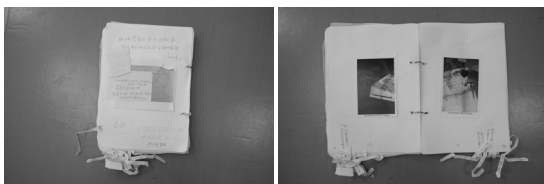
### 話すことでまた本づくりが始まる

はじめは、わたしが画家として開催した1つ個展の記録誌をシンプルに作ろうと思っていた。というのも、わたしはギャラリーの壁に直接絵を描き、最終的に消す作品を作っており、展覧会終了後に作品が物として残らないためだ。そういうことが起こったのだということをはなやかに記しておく必要があった。毎回、作品の撮影を写真家の方をお願いしているため、写真はすでにあって、学芸員と美術批評の方にも文章を寄せていただいていた。それらをただ並べるだけでも、十分によい記録誌になったと思う。しかし、古本さんと高松の喫茶店ですでに集まっている素材を前に話をするなかで、劇の台本のように写真と写真のあいだにト書きのような文章が入るといいのではという案が出た。わたしが個展会場で掲示していた文章がすでにあっただが、それは少々重たいので、何日に何をした、というような短い文はどうか、と古本さんが提案してくれた。写真は大きく数枚載せるというより、小さくなくてもいいから連続的な並びにして時間の経過を見せる…と本の姿が見えてくるにしたがって、じゃあ、今年の夏に開催するもう1つの個展の記録と2つで1つの本にしよう、展示図録ではなく出来事の記録として、となるとページ数は、部数は、と話は膨らみ、ここまでのものを作るのならと、結局絵画検討社の3冊目として作り出すことが決まっていた。

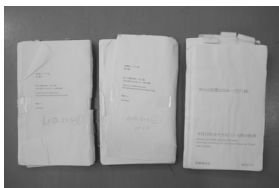


高田マル個展「向かって行く線、朝の挨拶」(2023年)での制作風景。撮影=間庭裕基

本に掲載する2つ目の個展を夏に終えて、わたしは写真選びを始めた。本は、まるで揺るがない固形物であるかのように棚に並んでいるが、皆さんご存知のとおり、ページをめくり読み始めることで時間が発生する。展示会場で作品を見るのとは異なったスピードで、ページをくるにしたがって読書体験が展開していく。この本は写真が主なので、写真選びとその並び順を考えるのに一番時間がかかってしまった。まずは全部の撮影写真を小さくカラーでプリントアウトし、一枚ずつに切り分け、これと思うものを壁に端から貼っていった。ページ数のことも考えて減らしたり増やしたり、日の傾きの変化で時間の経過を感じられるように並びかえたり。本の構成がだいたい決まってきたら、わたしは毎回ダミーブックを作る。A4のコピー用紙で作る簡易的なものだが、写真やテキストを切り貼りして何度もページをめくってページネーションのリズムを確認する。家で確認したり、場所を変えて外で確認したり。そして選んだ写真を古本さんに素材として送るときにダミーブックも郵送した。

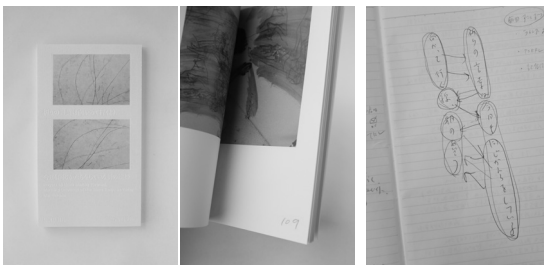


古本さんに送ったダミーブック。この時点で判型は決まっていなかった。



毎回プリントアウトし簡単に製本したゲラ。

ページレイアウトの案を古本さんはクラウドのフォルダで共有してくれるのだが、わたしは毎度実寸でプリントアウトして断ち落として簡単に綴じてからデザインを拝見している。パラパラとスピーディーにめくりやすいように小口寄りの余白は多め、ノンブルも時間の経過を伝える一要因にして、じゃあわたしがノンブルを手描きするのはどうですか？ 3案送ります、2番目がいいですね、じゃあ、それで…デザイン決定の主従は段階によって入れ替わっていくが、この頃にはこの本をどのようなものにするのか共有ができていたので相手のアイデアを当然の判断として受け取ることができる。古本さんの気持ちはわからないが、わたしとしては古本さんの出してくる案に根本的な違和感や本の内容への無理解を覚えたことはない。そうして3冊目も無事に物として形になっていった。



表紙にはOKムーンカラーを使用し、ホットプリントでタイトルを入れた。ノンブルは手描き。

3冊目のタイトルは掲載した2つの展覧会名を混ぜ合わせたもの。

### (絵画も本も) 壊れながら生まれる

わたしが画家としての活動を始めたのは2015年で、出版社を始める前なのだが、本をきっかけにわたしのことを知ってくれる人も多く、「高田さんって絵も描くんですね」と言われたこともある。「絵を描くことと本を作ることは高田さんのなかでどういう関係なんですか?」ということを知っていただくことも多い。絵を描くということは自分勝手に振る舞うことが許される行為だ。一方で、他人(世界)との関わりのなかで何かを作る必要があるときにわたしは本を選ぶ。本づくりでは文字や誌面に落とし込むときに否応なく客観的にならなければならない。自分勝手

にはなく、他人とのあいだにものを作るうえでその過程がちょうどいいのだと思う。

しかし、絵を描くことと本を作ることはわたしのなかで別の行為なのだが、ひとりの人間であるし、ずっと絵のことを考えているので双方での気づきが双方へ影響していく。たとえば、『忘れられない絵の話』の本づくりのなかで「壊れながら生まれる」という出来事に気がついたことで、その過程が絵画においても起こっているのではと考え2024年に制作した作品に《こわれながら生まれる(間違った言葉)》と名付けた。これはビニールシートに絵の具で日記を描いた作品で、ほとんど読めないほど描き崩された文字が運搬したり展示したりすることでつぎつぎに落ちていく。日記というとても私的なものが、公の場にさらされることで壊れていくが、それが多くの人に見られることと表裏一体になっている。たとえばこの文章だって、本づくりの過程のさまざまを削っており、わたし個人が体験してことのすべてを文字化できているわけではない。古本さんの本心も分からずじまいだ。何かを取りこぼしている、なかったことにしているとも言えるが、そうすることでこのようにお届けできている。それは良いことでも、悪いことでもなく、ただ人間の営みとしてそういうことはある、のだ。



高田マル《こわれながら生まれる(間違った言葉)》



\*

(たかだ まる/画家、絵画検討社代表)

### 【企画展のお知らせ】

白髪一雄生誕100年記念事業 関連企画展  
「常行三昧 Jogyo Zanmai」  
2024年7月20日(土)～9月23日(月/休)  
午前10時～午後6時 火曜日休館  
会場：A-LAB (兵庫県尼崎市西長洲町2丁目33-1)  
入場：無料  
作家：櫻井類、高田マル、大上巧真  
主催：尼崎市  
<https://www.ama-a-lab.com>



# 新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

## 『中村哲 思索と行動 「ベシヤワール会報」 現地活動報告集成 「下」 2002～2019』 ●中村哲 著

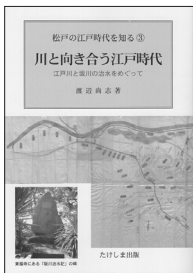


2023年6月に刊行された[上]の続編。[上]は1983年から2001年まで、アフガン国境の無医村と難民キャンプでハンセン病に立ち向かって苦闘する医師としての実践記録であった。[下]は2002年から凶弾に倒れる2019年12月まで、従来の医療と飲料水用の井戸掘りに加え、灌漑用水路建設という、国家規模のとてつもない大事業への挑戦の様子が事細かに報告される。2000年の大干ばつが活動転換の契機となった。多くの幼児が命を奪われ、牛の9割が死滅、人口の80%を占める農民は生きるすべも営々と築いてきた文化も失った。この惨状を目の前にして、農民を故郷につなぎとめ、自立した農村に回復させたいと、15年計画の水利事業「緑の大地計画」を発表。ためらうことなく行動に移した。中村医師でしかないことである。行政や地元民との交渉、資

金調達、工事と農業専門日本人スタッフの手配、設計、資機材の用意、技術者だけでなく会計担当や連絡員も置いた。山積する課題に立ち向かいながら、工事に着手。作業は連日数百名の住民が担った。この間、米軍の誤認による機銃掃射、土石流による取水口の崩壊など苦難の連続であった。それでも誰も挫けなかったのは、住民に生きる希望と、外部支援がなくても住民だけでやっていたけるよう工事に土地の伝統的技法を取り入れたことで自信が芽生えたからだ。大事なのはこれからである。人種や宗教の垣根を超えて協力し、「人と人、人と自然の和解を訴え」、これからも事業を継続する。中村医師の遺志を世界は重く受け止めなければならない。(飯澤文夫)

◆2700円・A5判・454頁・**志羊社**・福岡・202406刊・ISBN9784907902353

## 『川と向き合う江戸時代』 ●渡辺尚志 著



江戸時代の百姓の営みについて、各地の農村に残る古文書をひもときながら研究を重ねてきた日本近世史の研究者がその知見を生かし、地元の千葉県松戸市内に残る古文書を丹念に読み解いてゆく。厳めしい古文書が現代語訳された途端、生々しい鮮度抜群の読み物として蘇る。著者の「松戸の江戸時代を知る」シリーズはまるで自分の住む町で現在進行中の事件を扱うルポルタージュのように読めて面白い。本書はシリーズ3作目だが、過去2作では小金町や大谷口村に住む百姓同士が助け合い、時には反目しながらも、常識的なイメージと違い一致団結して領主に対して敢然と自己主張するという、当時の百姓たちの自治や相互扶助のありようについて学んだ。本書では流山から松戸の最南端まで取り扱う範囲が広がり、江戸川と

その東側を平行して流れる坂川の治水が中心テーマである。江戸川のような大河の治水は人の命がかかった事業だけに、当時の関係者の緊迫した様子が伝わり、読み進めるうちにぐいぐい引き込まれる。そして、治水は江戸時代だけでなく、水害の多発する現代社会につながるテーマであり、公共事業への向き合い方に対して、江戸時代の父祖たちが良いお手本を示してくれた希望の書としても読める。著者も関わりのある松戸市幸谷の関さんの森を貫通する道路開発に対して「待った」をかけた市民の記録を記した関啓子『関さんの森』の奇跡』（新評論）と併せて読まれることをおすすめしたい。(石井一彦)

◆1200円・A5判・138頁・**たけしま出版**・千葉・202405刊・ISBN9784925111751

## 『すこし広くなった「那覇の市場で古本屋」それから』 ●宇田智子 著



那覇の市場中央通りに「市場の古本屋ウララ」がオープンしてから13年半。店主が開店までのいきさつや沖縄の地で日々思うことなどを綴ったロングセラー『那覇の市場で古本屋 ひょっこり始めた〈ウララ〉の日々』出版からも11年がたった。本書はそれ以降の2016年から2024年に書かれたものをまとめたエッセイ第2弾。日本一狭い古本屋（3坪）と言われていたが、50年以上続いていた隣の洋服屋の閉店が決まり、迷った末、そこも借りることにしたため、1.5坪を合わせて4.5坪になった。

変わったのは店の広さだけではなく、向かいの第一牧志公設市場の建替、市場中央通り第1アーケードの撤去、新型コロナウイルスの流行など、周りでいくつもの変化があった。公設市場建替

にあたり、移転も考えたが、一部始終を見届けたいと現在地に残ったり、路地に商品を並べるなら沖縄ではアーケードが不可欠とわかり、再整備に関わったりと、精神的に活動する。小さな店が寄り集まって通りや市場ができ、時間と空間の層がよそにない価値を生み出す。そんな記録が書けたらと願い、変わりゆく環境の瞬間の動きをうまくつかまえている。洋服屋の店主に「今から50年続けるんだよ」と言われ、つまり90歳になるまで、市場ではありえない年齢ではないと意欲的。前作が韓国と台湾で翻訳されると客層もグローバル化。これからも店主ならではの眼差しで市場や本について伝え続けてほしい。(Y)

◆1800円・四六判・245頁・**ボーダーインク**・沖縄・202405刊・ISBN9784899824657

## 『お話の小屋で～妖精物語集～』 ●高畑吉男 著



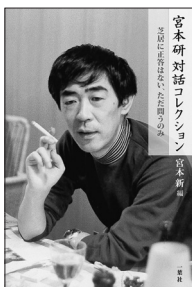
昔々、アイルランドの田舎には「ランプリングハウス」というものがあつたとか。そのままの意味でいうとただっ広い家と訳すが、そこは、野良仕事や行商を終えた人たちが集まって酒を飲んだり、カードゲームや歌、踊りを楽しむ、そんな娯楽の場所だった。そんななかでも楽しまれていたのは、暖炉を囲んでの語りだった。だから、ランプリングハウスを「お話の小屋」と呼ぶ人もいたのだ。

本書はアイルランドの妖精たちに魅せられて40年、妖精譚収集をライフワークとしてきたという「妖精譚の語り部」たる著者が語る妖精物語集である。本書の特徴の一つと言っていると思うが、物語の合間合間に、「ちょこっと妖精学」というコラムがあって、妖精雑学を楽しむことができる。中でも興味深く思われるのは、

語られた妖精物語とあまりにも類似した日本の昔話、伝説を紹介しているところだ。例えば、『妖精に攫われた女が帰ってくる話』は、ある日フラフラと野原に出て行ったきり戻らなくなった女の話で、この物語がコラムでは日本の神隠し譚と類比され、佐々木喜善の『東奥異聞』から、梨の木の根元に草履を脱ぎ捨てたまま行方知れずとなった遠野の娘の話が引き出されている。また『海の底にある石臼』は、弟が悪魔から手に入れた、望み通りのものを生み出す石臼を欲深い兄が無理やり手に入れるという話であるが、よく知られた日本の『海の水はなぜ塩辛い?』や『塩吹臼』といった昔話が引き合いに出されている。(N)

◆ 1000円・B6判・110頁・銀河企画・東京・202407刊・ISBN9784909793164

## 『宮本研対話コレクション 芝居に正答はない、ただ問うのみ』 ●宮本新編



「戦後の危機の今よみがえる／戦後を代表する劇作家の肉声」——この対話集のキャッチフレーズである。確かに「戦後」は風前の灯。マスメディア総動員で事あるごとに「敵国」とみなしている中国と、明日どんばちが始まって不思議ではない。それも「防衛」という名の、この国からの「敵」基地攻撃を端緒として。かの国に、取り返しのつかない加害を加えてから、まだ100年も経っていないかというのに…… 劇作家・宮本研の原点は、その「敵」中国にある。結果的に中国侵略の片棒を担いだ者の子息として、決して整理できないその時間をずっと曳きずりながら、「戦後」を彷徨い、この国の「近代」に劇作で挑み続けてきた。「国家」はもちろん、「歴史」や「民衆」までも疑いの目を向け、答えのない?を連発しながら。戦後を代表する劇作家で、もう一人欠かせないのが木下

順二。この二人は、劇作のスタイルも匂いも真逆だが、共通点も意外に多い。例えば宮本研の代表作の一つ『明治の枢』は、木下順二と縁の深い山本安英の「ぶどうの会」からの依頼で執筆。しかし、実は田中正造を主人公にした戯曲は、木下順二が最初に計画していたという。では、なぜ木下はやめて、宮本は書き上げたのか。そのことについても触れた二人の対談が、この本の最初に載っているが、空間や時間を超えて多角的・根源的に考えさせる。

この二人の対談をはじめとして、多彩な演劇関係者が登場して対話する本書は、芝居の本義と価値、そして覚悟を突きつける。懐疑と批判が消えることがいかに危ういか、と。(和)

◆ 4500円・四六判・504頁・一葉社・東京・202408刊・ISBN9784871960946

## 『特急やくも写真集』 ●梅田耕治 著



やくも号は山陽本線・伯備線・山陰本線を經由して、岡山と出雲市の間を結ぶ特急列車です。1972年の登場以来、伯備線を經由して瀬戸内海側と日本海側を結ぶ陰陽連絡特急として50年以上走り続けてきました。本書はそんなやくも号の走る風景を収めた写真集です。沿線の景色はもろろん風光明媚。やくも号は岡山県側では高梁川、峠を越え鳥取県に入ると日野川に沿って中国山地を駆け抜けていきます。そこでは季節ごとに里山の風景が美しく写されています。さらに日本海側には名峰大山が背後に控え、中海を望むこともできます。山陰の雪景色の中を走る姿も印象的です。

そして忘れてはいけないのが歴代の車両たち。伯備線非電化時代に活躍した、懐かしのキハ181

系の姿も見るができます。それに次いで登場したのが381系電車。こちらは急カーブの多い伯備線に対応した振り子式車両。カーブでもスピードを落とさず走れる車両として40年以上やくも号として活躍した、まさにやくも号の代名詞的な車両です。381系は色のバリエーションも豊富で赤とパーズの国鉄色だけでなく、紫のスーパーやくも塗装、緑やくも塗装、白と赤のゆったりやくも塗装などがありました。いずれの走る姿も本書には収録されています。そして掉尾を飾るのが今春登場した273系。新しいやくも号の歴史を作っていくことでしょう。273系登場にあたり381系は今夏で引退となりました。本書はそれを記念する一冊でもあります。(副隊長)

◆ 2500円・251mm×240mm判・107頁・今井出版・鳥取・202405刊・ISBN9784866113920

# 売行良好書

期間：2024年6月15日～7月14日

※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

## 【出荷センター扱い】

- (1) 『あなたのための短歌集』 1700円・ナナロク社
- (2) 『特急やくも写真集』 2500円・今井出版
- (3) 『中村哲 思索と行動 「ベジャワール会報」 現地活動報告集成「下」 2002～2019』 2700円・忘羊社
- (4) 『パンクの系譜学』 2600円・書肆侃侃房
- (5) 『道産子たちの沖縄戦記 あゝ沖縄』 2700円・かりん舎
- (6) 『水上バス浅草行き』 1700円・ナナロク社
- (7) 『決定版 目からウロコの琉球・沖縄史』 1800円・ボーダーインク
- (8) 『ロシア文学の怪物たち』 1800円・書肆侃侃房
- (9) 『ヤジと公安警察』 1100円・寿郎社
- (10) 『韓国ドラマを深く面白くする22人の脚本家たち』 2200円・クオン
- (11) 『よみかせのきほん』 750円・東京子ども図書館
- (12) 『明治の旧彦根藩士たち』 1500円・サンライズ出版
- (13) 『たやすみなさい』 2000円・書肆侃侃房



## 【ジュンク堂書店池袋店 地方出版社の本—センター扱い図書】

- (1) 『とちぎ日曜歴史館』 1800円・随想舎
- (2) 『あおむけの踊り場であおむけ』 1800円・書肆侃侃房
- (3) 『老人ホームで死ぬほどモテたい』 1700円・書肆侃侃房
- (4) 『特急やくも写真集』 2500円・今井出版
- (5) 『パンクの系譜学』 2600円・書肆侃侃房
- (6) 『千夜曳糞』 1800円・青磁社
- (7) 『建築が夢見る音楽』 2500円・東京藝術大学出版会
- (8) 『日本のいちご栽培史』 2000円・随想舎
- (9) 『発芽／わたくしが樹木であれば』 1400円・青磁社
- (10) 『「砂の器」と木次線』 1800円・ハーベスト出版
- (11) 『ジソウのお仕事 データ改訂版』 1800円・フェミックス
- (12) 『沖縄県知事 島田叡と沖縄戦』 1500円・沖縄タイムス社
- (13) 『小さきものの近代2』 3000円・弦書房
- (14) 『満腹の惑星』 2100円・弦書房
- (15) 『不死の亡命者』 6200円・中国書店(集広舎)
- (16) 『全訳 遠野物語』 1600円・無明舎出版
- (17) 『よくわかる琉球 沖縄史』 1200円・琉球新報社
- (18) 『おきなわのお菓子』 1500円・ボーダーインク
- (19) 『福祉社会学の思考』 1900円・弦書房



以下ホームページ等でも各種情報提供を行っております。ご利用ください。  
 URL : <http://neil.chips.jp/chihosho/> X (旧Twitter) 公式アカウント : @local\_small

## トピックス — ★★★

▼今号11ページに、「情報誌【アクセス】休刊のおしらせ」を掲載いたしました。御一読いただければ幸いです。長くご愛顧いただいた購読者様をはじめ、これまで『アクセス』誌を支えていただいた皆様には深く感謝いたします。折しも全国紙の毎日新聞が富山での配送を9月末で休止するとの報道に接しました。全国47都道府県に配送網を保ってきた同社の休止は初めて、とのこと。『アクセス』とは比べべくもありませんが、印刷輸送コストによる利益の圧迫や購読者の減少といった構造的要因は昨今の紙媒体に共通しているようです。紙媒体として休刊した後の情報発信方法につきましては、形が明確になり次第改めて報告させていただきます。

▼10ページに掲載いたしました地方・小出版流通センター通信でも取り上げられていますが、【深夜叢書年代記—流論と自存—】(齋藤慎爾著 ISBN978-4-88032-506-4 本体3,400円) が入荷いたしました。弊社では普段何気なく深夜叢書社の刊行書籍を流通販売させていただいているのですが、1964年当時の齋藤慎爾さんの創業理念に触れると、それがいかに光栄なことか、と再認識させられるばかりでした。「出版行為は、思想の伝達のみならず、もしも編集作業において自覚的であれば、それ自体すぐれて思想的である。それは、時代の苦い状況のなかで、いうならば、一個の人間存在の相を露わにしなが、世界についての魂の態度を現実的に追求し、確立する行為を内在させている。私たちは、このようなものとして出版を考える…」 「白昼の官許の文学史に録されることを恥じる。世界を凍らしむるていの生存の根底に依拠する己が暗冥を、史家のですさびに委ねるのを拒絶する。そんな出版社は可能であるか。」(『創業前夜六〇年安保の余燼のなかで』から)

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

# ジュンク堂書店 池袋本店

淳久堂書店

営業時間：午前10時～午後10時

池袋でああなたのふるさとに帰ってみませんか？

2階「ふるさとの棚」では、地方小出版流通センター扱いのご当地本を幅広く取り揃え、皆様のお越しをお待ちしております。

〒171-0022  
 東京都豊島区南池袋 2-15-5  
 TEL 03-5956-6111  
<http://www.junkudo.co.jp>

